

シンポジウム

身体・社会・感染症

—哲学・倫理学・宗教研究はパンデミックをどう考えるか—

哲学の視点から

パンデミックと差異の再構成

—「出来事」から「新しいロゴス」に向かうために—

田中祐理子

(京都大学・白眉センター所属)

私たちの個人的な生において、最悪の恐れや最良の希望が現実にかかる事柄に対して私たちをうまくそなえさせたためしがないのとまったく同じように――なぜなら、予期された出来事が起こった場合ですらすべてが変化する以上、私たちは計り知れない文字どおりの「すべて」に対してそなえることはけっしてできない――人類の歴史におけるそれぞれの出来事は、人びとが行なったりこうむる事柄や種々の新しい可能性（それは人々が欲する一切の意図やあらゆる起源がもつ意味を超越する）からなる予期せぬ光景を顕わにする。この予期せぬ新しいものをある時期にそれが含意するすべてのものとともに探り当て、その意義を余すことなく明らかにすることが歴史家の務めである。歴史家は、彼の物語は始まりと終わりをもっているが、それはより大きな枠組み、つまり歴史そのもののなかで起こっているということを知らなくてはならない。しかも、歴史は多くの始まりをもちながら終わりをもたない物語である。

ハンナ・アーレント「理解と政治（理解することの難しさ）（1954）

『アーレント政治思想集成Ⅱ』138頁、2002.

[原著 *Essays in Understanding 1930-1954*, 1994]

新しさは——永遠に繰り返される事象にかかわる  
自然科学者とは違って——**つねにただ一度だけ起  
こる出来事を扱う**歴史家の領域である。

ハンナ・アーレント「理解と政治（理解することの難しさ）（1954）  
『アーレント政治思想集成Ⅱ』137頁、2002.  
[原著 *Essays in Understanding 1930-1954*, 1994]

それぞれの出来事の現実の意味は、私たちがそれに割り当てることができるような過去の無数の「原因」（第一次世界大戦のような出来事における「原因」と「結果」の異様な不釣り合いのことを考えてみるだけでよい）をつねに超越しているだけではない。この過去そのものが出来事をまっけはじめて存在するようになるのである。**取り返しのつかない事柄が起こってはじめて、私たちはその歴史的背景を辿るのを試みることができる。**出来事はそれ自身の過去を照らしだす。出来事はけっして過去から演繹されうるものではないのである。

ハンナ・アーレント「理解と政治（理解することの難しさ）（1954）  
『アーレント政治思想集成Ⅱ』137頁、2002.  
[原著 *Essays in Understanding 1930-1954*, 1994]

**それ自身の過去を照らすほどの大きな出来事が生じるときにはいつも歴史が生まれる。そのときはじめて、過去に起こった事柄のカオス的な迷宮は、始まりと終わりをもつがゆえに、語ることのできる一つの物語として立ち現われる。**

ハンナ・アーレント「理解と政治（理解することの難しさ）（1954）  
『アーレント政治思想集成Ⅱ』137頁、2002.  
[原著 *Essays in Understanding 1930-1954*, 1994]

1933年2月27日の国会議事堂放火事件と、さらにその夜の不当逮捕でしょうか。いわゆる「予防拘束（シュッツハフト）」のことです。ご存知のように、人びとはゲシュタポの地下室か強制収容所に連行されました。それから始まったのは実に恐るべきことです。もっとも、今日ではそれより後に起こったことによって影が薄くなっていますけれども。**私にとってこの事件は直接的な衝撃でしたし、そのときから責任を感じたのです。つまり、もはや傍観者ではいられないと思ったのです。私はさまざまなこと役立とうと試みしました。**

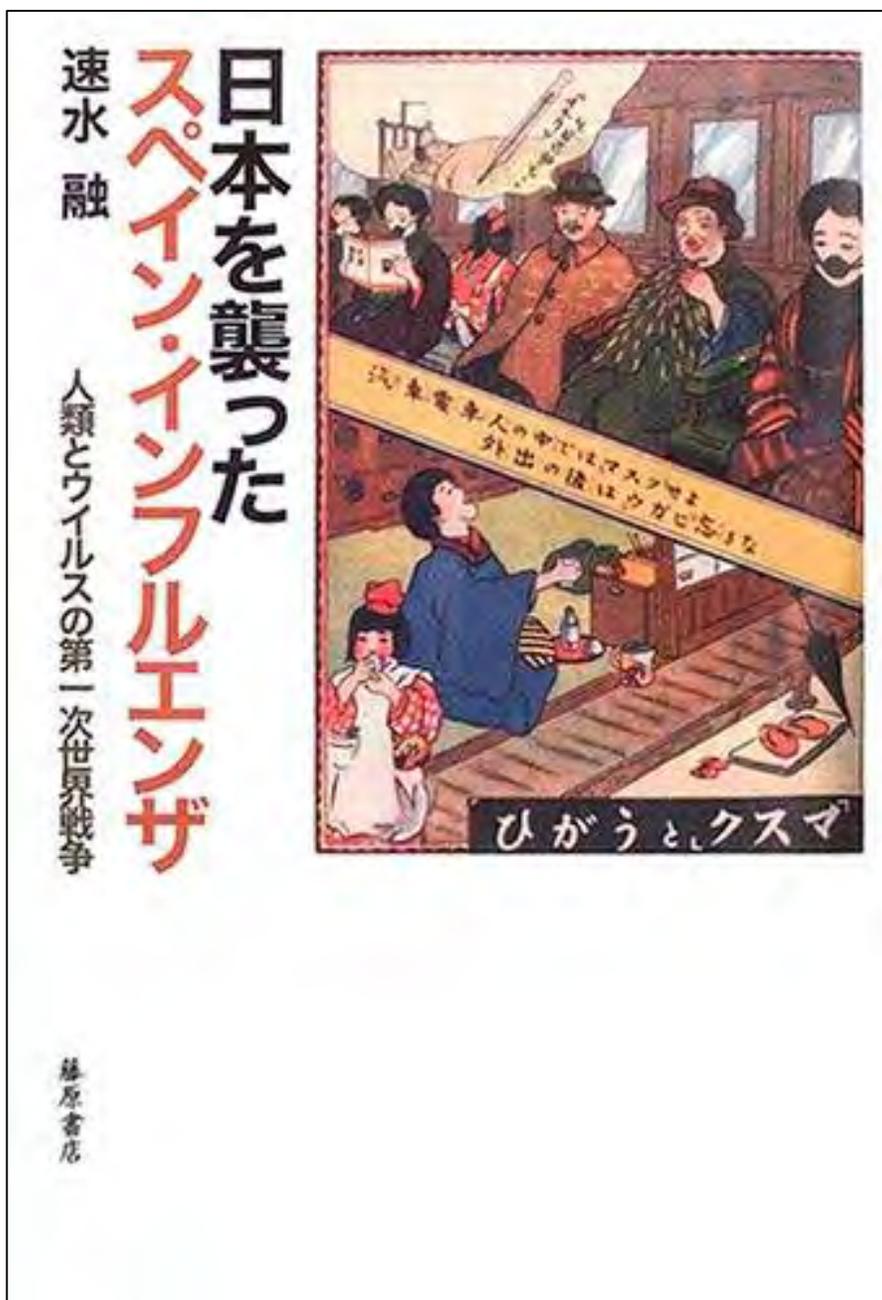
ハンナ・アーレント「何が残った？ 母語が残った」（1964）  
『アーレント政治思想集成Ⅰ』6-7頁、2002。  
[原著 *Essays in Understanding 1930-1954*, 1994]

19世紀に広くとりあげられた正常と病理の関係について命題を批判的に検討することと結びつけて、わたくしの考え方を、ぜひ提案しようとも思った。量的な変動を除けば、病的現象は、それに対応する正常な現象と同一であるとする命題が、ここで問題になる。**こうすることは、「問題を終結させるよりもむしろそれを再開させよ」という哲学思想の要請に従うことなのだと思う。**レオン・ブランシュヴィックは、哲学について、それは解決済みの問題の科学であるといった。この簡潔で意味深い定義を、採用することとする。

ジョルジュ・カンギレム『正常と病理』11頁、1987.  
[原著 *Le normal et le pathologique*, 1966]



Pieter Bruegel the Elder, *De triomf van de Doodscirca*, 1562. [Museo del Prado]



速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店、2006年.

…他方で、伝染の原因となる種<sup>たね</sup>が、我々の外部からもまた到来し、我々の体内で最初に生まれるものでないということも、同じように明らかにある。それというのも、病気が多くの者の間に広く広まり、流行病と（**Epidemias**）呼ばれるのを、我々は頻繁に見るからである。いくつかの流行病は、多くの都市や地方に共通であるが、伝染性ではなく、ただ「共通（**communes**）」だと言われる。他方で、別のいくつかの流行病は伝染性（**contagiosi**）であり、最初にひとりの者に発生すると、大気の一般的な状態の関与がなくとも、それらの病気は他の者に伝染を運ぶ。これらの病気は単に「共通」とは言われず、伝染性なのである。このようなものとしては、例えばトゥキュディデスの描いたギリシア中に広がった疫病や、また今日のイタリアに現れた、粒状発疹病や斑点発疹病と呼ばれたりするものがある。

Fracastoro, *De Contagione*, 1546, Book 1, Chapter 12.

『原典 ルネサンス自然学』上、2016.



Lord, haue mercy

on London

I follow.

We fly.

Wee dye.

Keepe out.

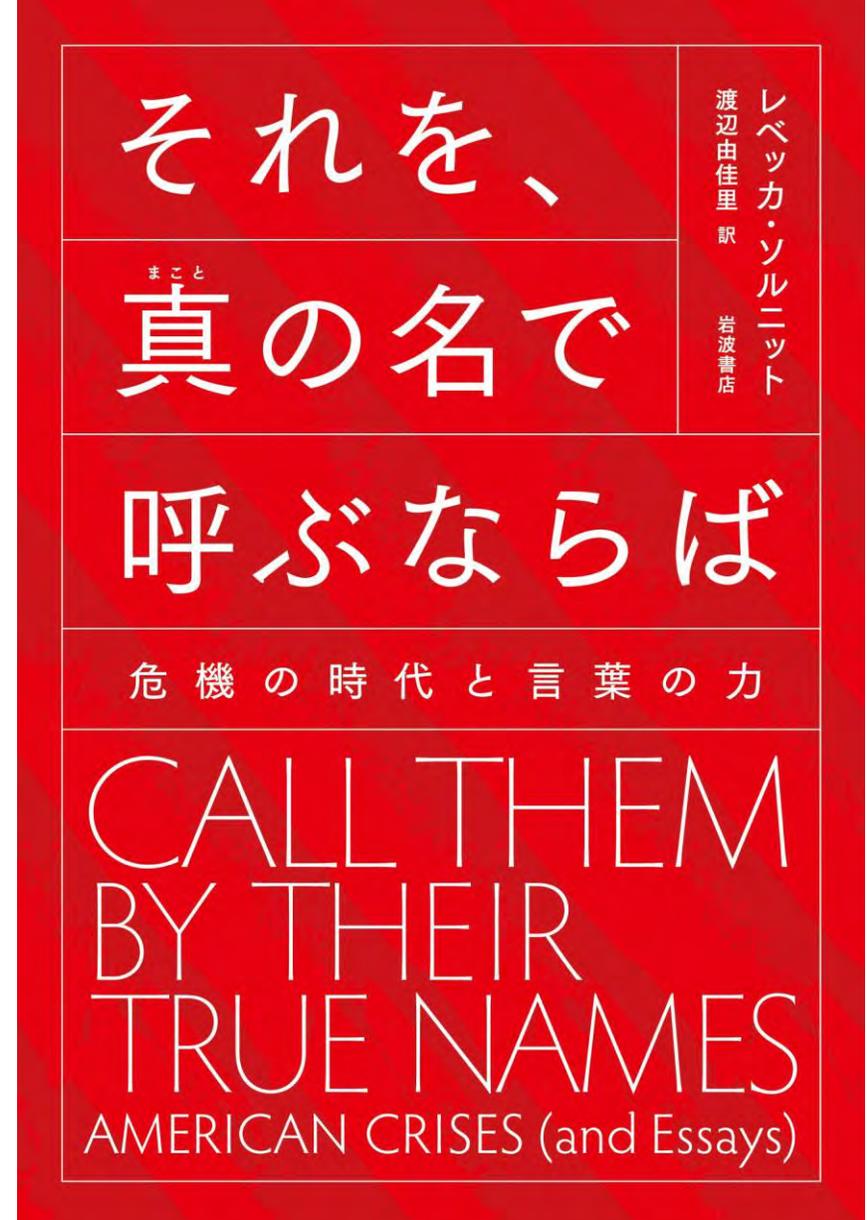
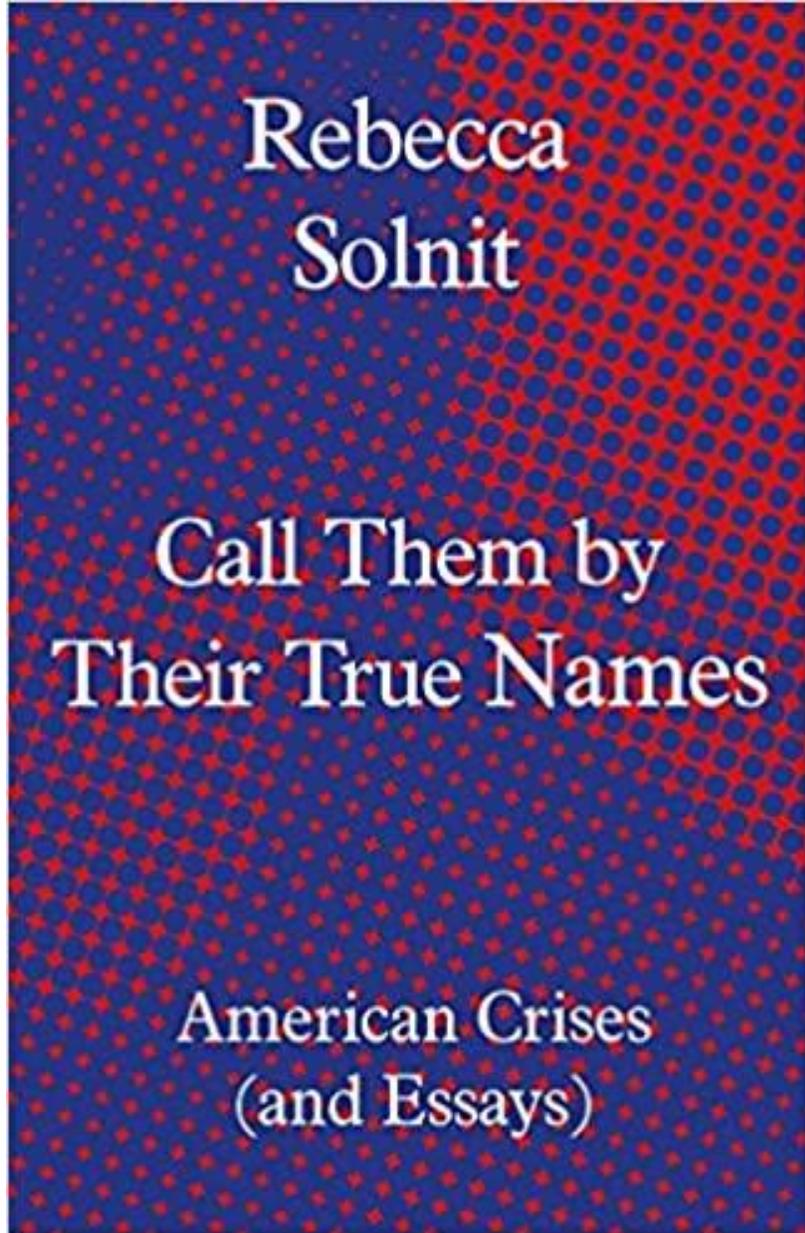
Thomas Dekker, *A Rod for Run-awayes*, 1625.

つまり、目の前を行き交う死に脅かされた人々が、自らのアイデンティティを失い、仮面を脱ぎ捨て、地位を忘れて、自分がまもなく死ぬことを知る人々がそうするように遊興に身を任せる、そのような混乱として、ペストが描かれているということです。個性の解体の文学としてのペスト文学。そこには、個性が解体し、法が忘れ去られる瞬間としての、ディオニュソス祭的なペストという夢があります。ペストが始まる瞬間、それは、都市においてあらゆる規則性が取り除かれる瞬間である。ペストは、身体を犯すように、法を犯す。少なくともこれが、ペストの文学的な夢です。しかし、ペストについてのもう一つ別の夢があります。それは、政治権力が完全なかたちで行使される見事な瞬間としてのペストという、政治的な夢です。

ミシェル・フーコー『異常者たち』52頁、2002.  
[原著 *Les anormaux*, 1999]

あなたは誰ですか？わたしは誰でしょう？災害の歴史は、わたしたちの大多数が、生きる目的や意味だけでなく、人とのつながりを切実に求める社会的な動物であることを教えてくれる。そして、それはまた、もしわたしたちがそのような社会的動物ならば、ほぼすべての場所で営まれている日常生活は一種の災難であり、それを妨害するものこそが、わたしたちに変わるチャンスを与えてくれることを示唆している。**災害は普段わたしたちを閉じ込めている塀の裂け目のようなもので、そこから洪水のように流れ込んでくるものは、とてつもなく破壊的、もしくは創造的だ。**

レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』427頁、2010.  
[原著 *A Paradise Built in Hell*, 2009]



レベッカ・ソルニット『それを、真の名で呼ぶならば』 渡辺由佳里訳、岩波書店、2020年。  
[原著Solnit, *Call Them by Their True Name*, Granta, 2018]

生の基礎経験から生まれ、その把握として、表現として、この基礎経験そのものを活かし、発展させることに役立つことのできたロゴスは、それが絶対的なる専制的なる位置を占めることによって、今は却て生そのものを抑圧し、圧迫するに到る。**変化する運動する生に於ける基礎経験が或る強度と拡張とに達するとき、それはもはやロゴスの圧迫に堪えることが不可能となり、却てこの旧きロゴスに反対して反抗して、みずから新しきロゴスを要求する。**我々はここにひとつの弁証法的なる関係を発見し得るであろう。

三木清「人間学のマルクスの形態」（1927）『三木清エッセンス』182頁、2000.

## Brazil's Bolsonaro questions coronavirus deaths, says 'sorry, some will die'

By Pedro Fonseca, Marcelo Rochabrun

4 MIN READ



RIO DE JANEIRO/SAO PAULO (Reuters) - Brazil's President Jair Bolsonaro on Friday cast doubt on Sao Paulo's death toll from the coronavirus outbreak and accused the state governor of manipulating the numbers for political ends, without giving evidence for his claims.



“I’m sorry, some people will die, they will die, that’s life,”  
Bolsonaro said in a television interview on Friday night.  
“You can’t stop a car factory because of traffic deaths.”

## 文献表〈引用順〉

ハンナ・アーレント 『アーレント政治思想集成』 1&2, 齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳、みすず書房、2002年。  
[原著Arendt, *Essays in Understanding. 1930-1954*, Schocken, 1994]

ジョルジュ・カンギレム 『正常と病理』 滝沢武久訳、法政大学出版局、1987年。  
[原著Canguilhem, *Le normal et le pathologique*, P.U.F., 1966]

速水融 『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』 藤原書店、2006年。

『原典 ルネサンス自然学』 上、池上俊一監修、名古屋大学出版会、2016年。  
[原著Fracastoro, *De Contagione*, 1546]

ミシェル・フーコー 『異常者たち』 慎改康之訳、筑摩書房、2002年。  
[原著Foucault, *Les anormaux*, Gallimard/Seuil, 1999]

レベッカ・ソルニット 『災害ユートピア』 高月園子訳、亜紀書房、2010年。  
[原著Solnit, *A Paradise Built in Hell*, Viking: 2009, Penguin: 2010]

レベッカ・ソルニット 『それを、真の名で呼ぶならば』 渡辺由佳里訳、岩波書店、2020年。  
[原著Solnit, *Call Them by Their True Name*, Granta, 2018]

三木清 『三木清エッセンス』 内田弘編、こぶし書房、2000年。